

ふいが城遺跡

九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報(別府・大分地区)



1986

大分県教育委員会
日本道路公団

表紙写真 十文字原より



ふいが城遺跡全景

例　　言

1. 本書は九州横断自動車道（湯布院一大分間）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要報告である。
2. 発掘調査は日本道路公団福岡建設局の委託事業として、大分県教育委員会が実施した。
3. 調査団の構成は以下の通りである。

調査指導員 賀川光夫（県文化財保護審議員委員・別府大学教授）

阿蘇品保夫（熊本市立高校教諭）

調査主任 後藤宗俊（県文化課文化財専門員兼埋蔵文化財係長）

調査員 清水宗昭（県文化課主査）、牧尾義則（同主任）、栗田勝弘（同主事）、西哲弘（同主事）、後藤一重（同主事）、永松みゆき（同嘱託）、桑原幸則（同嘱託）、田中裕介（同嘱託）

また、調査期間中、池辺千太郎（立正大学学生）、神田高士（奈良大学学生）、河野史郎（別府大学学生）、藤本啓二（別府大学学生）、吉田寛（山口大学学生）の協力を得た。

上記関係者のほか、真野和夫（県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究員）、海老澤衷（同研究員）、乙咩政己（宇佐市教育委員会）、安部巖（別府市文化財調査員）、矢田保の諸氏には現地で指導・助言をいただいた。

また、輸入陶磁器については、鈴木重治氏（同志社大）のご教示を得たが、文責は田中にある。

4. 本書の執筆と編集は、清水、田中があたった。

目　　次

I	はじめに	(清水)	1
II	ふいが城遺跡	(田中)	2
1)	遺跡の立地と環境		2
2)	遺跡の概要		4
3)	遺物		12
4)	小括		14
III	机張原・高崎地区	(田中)	16
IV	まとめ	(清水)	18

I は じ め に

九州横断自動車道(湯布院一大分間)については、昭和56年度から発掘調査を開始し、主として別府地区の調査を重点的に行ってきました。本年度も調査の大部分は別府市ふいが城遺跡の調査に費したもの、今回初めて大分地区の調査も着手できた。

ふいが城遺跡の調査については、当初の分布調査では確認されず、昭和60年3月、伐採後の踏査において現場内発見がなされたものである。

遺跡はいわゆる中世(室町時代)の典型的な山城であるが、規模も小さく、確たる文献にも登場してこない、いわば完全に“忘れられた山城”である。ただ、遺構の保存が良好とみられたので、すでに道路工事については発注済みであった関係で、その対策のため早急に日本道路公団大分工事事務所と協議を行った。その結果、工法の変更等による遺跡の回避は無理との結論に達し、記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査は61年5月から開始し、9月初旬に完了した。途中梅雨期、炎暑もあって調査は困難を極めたが、遺構の広がりが当初の予測よりも小さいこともあってほぼ予定通りの期間内で終えることができた。

城跡は、一重の外堀と空堀(堀切り)をもつ単郭式の山砦であり、構造としては極めて単純なものであるが、空堀の規模も大きく、かつては速見郡内における重要な支城の一つであった可能性をうかがわせた。またここでは、平安時代の土師器も出土しており、山城跡の前史の遺物の存在も確認することができた。

大分地区では、61年2月から発掘調査を開始し、3月に完了した机張原遺跡の調査では旧石器時代の包含層を検出し、その広がりを把握することができた。一方、高崎遺跡は全面的に調査はできなかったが、調査部分については遺構・遺物は検出できなかった。

なお、発掘調査に際しては、株式会社羽野組・有限会社明興社・佐藤橋夫氏等の多くの方々の協力をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。



第1図 路線と遺跡の位置

- (1 ふいが城遺跡
2 机張原・高崎地区)

II ふいが城遺跡

1) 遺跡の立地と環境

大分県のほぼ中心に位置する別府市は、鶴見岳を中心とする火山の噴出物によって形成された扇状地上に発達した都市で、日本有数の温泉地として知られている。この石垣原扇状地を北に進むと十文字原高原台地から下降するいくすじかの丘陵によってさえぎられる。ふいが城遺跡は、この北鉄輪丘陵中の一独立丘上標高390mに位置する。

眺望は、東と南に向かって開け別府湾を一望できる位置にあるが、周囲からは類似の丘陵にまぎれて視認しがたい（写真1）。

この地を含めて別府市一帯は律令制時代の速見郡朝見郷にあたる。平安時代には、宇佐弥勒寺領竈門荘がふいが城遺跡の北の谷を流下する柴石川の下流を中心に、宇佐宮領石垣荘が南の山なみをへだてた扇状地上に成立する。

奈良・平安時代の遺跡は今日知られていないが、中世になると北鉄輪丘陵の先端に位置する羽室山付近に中世竈門荘地頭職を世襲した竈門氏一族の墓地石塔群が、現在“御靈社”として祀られており、その付近は羽室遺跡として知られ、鎌倉時代の遺構・遺物が検出されている。また、ふいが城遺跡の近くを鉄輪一湯山一十文字原経由で宇佐に至る古道の存在が推定され、立地を考える上での一論点を提供している。

（参考文献）『大分県史古代篇II』1984年大分県、『別府市誌』1985年別府市役所

羽室遺跡—高橋徹・江田豊（編）『羽室遺跡発掘調査概報』1983年大分県教委

御靈社石塔群—『べっぷの文化財』6.1974年別府市立図書館



第2図 ふいが城遺跡と周辺遺跡(中世) 1 竈門八幡社 3 羽室遺跡
2 御靈社石塔群 4 火男火壳社(散布地)

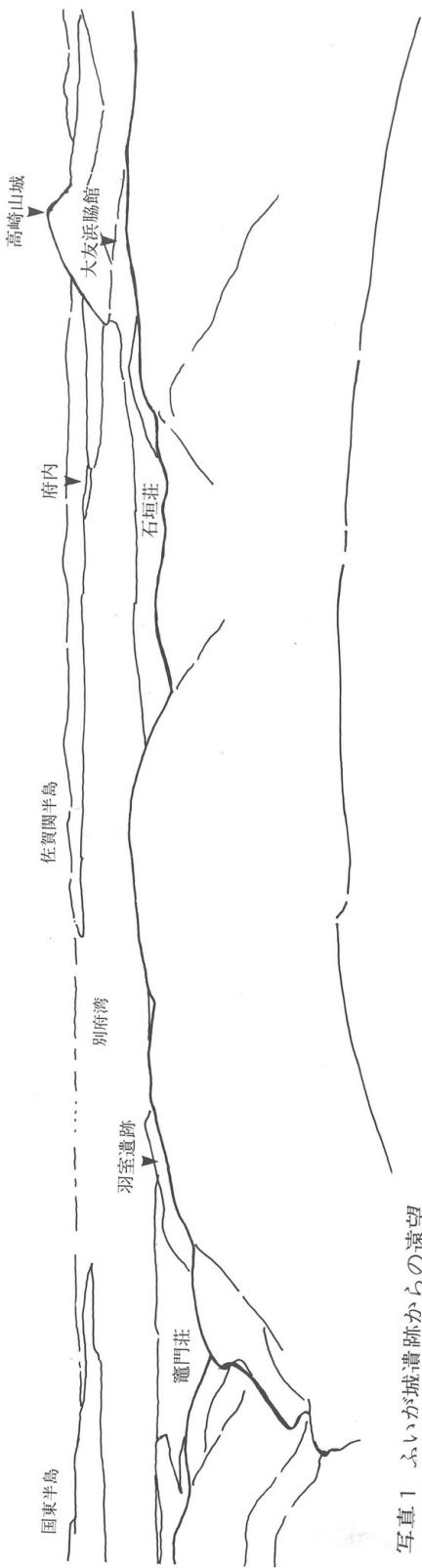
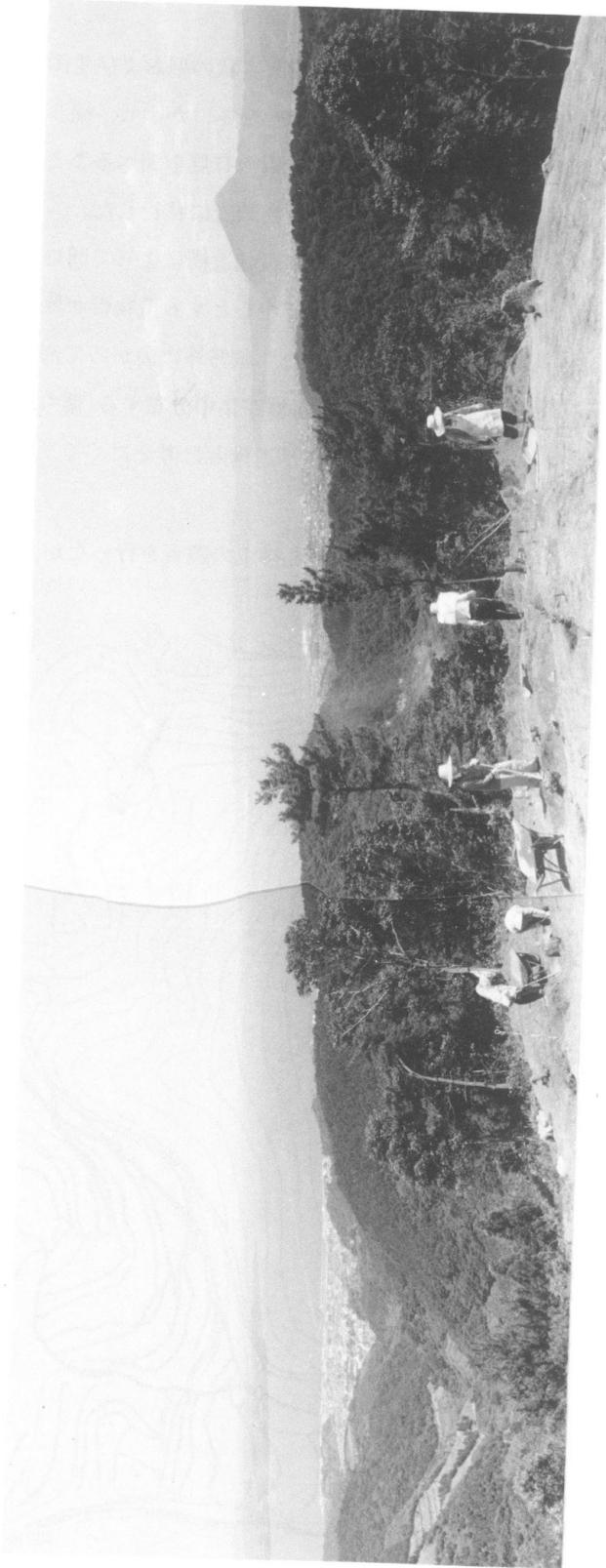


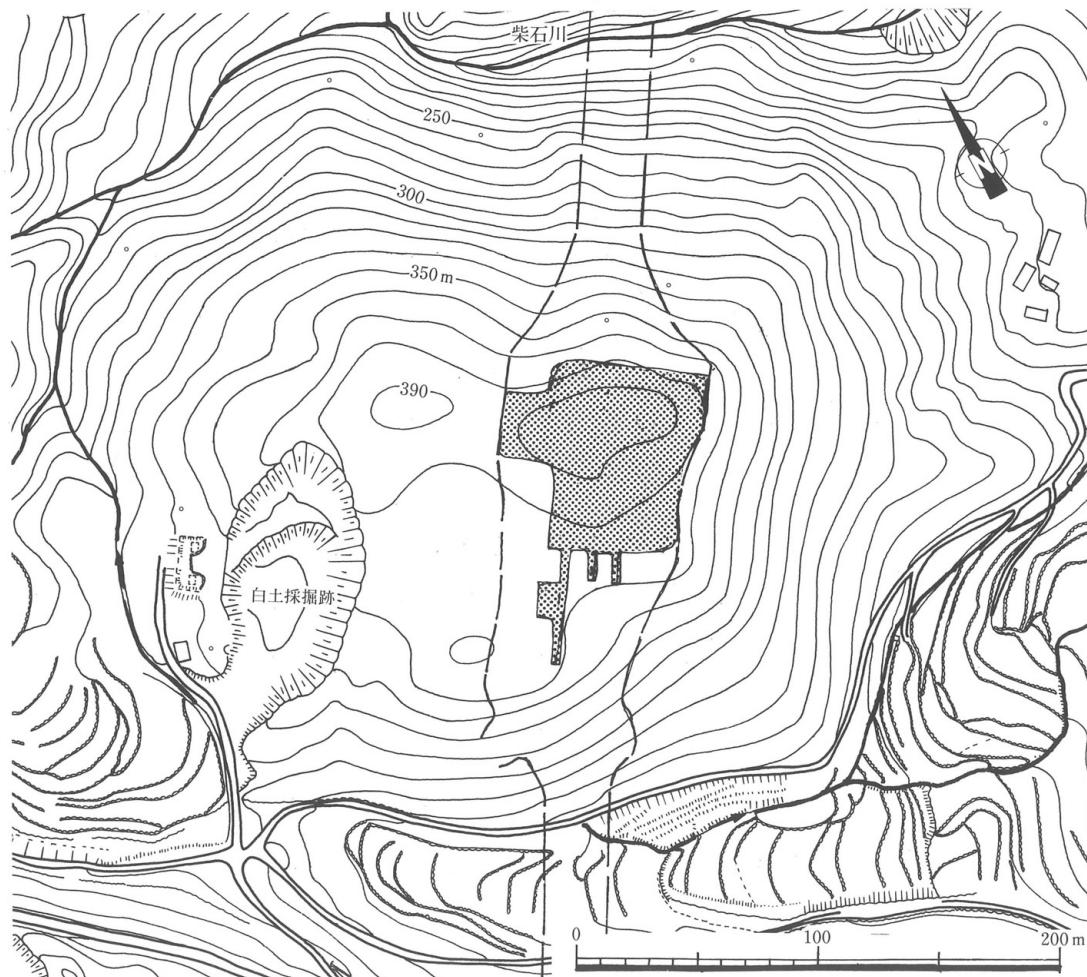
写真1 ふいが城遺跡からのお景

2) 調査の概要

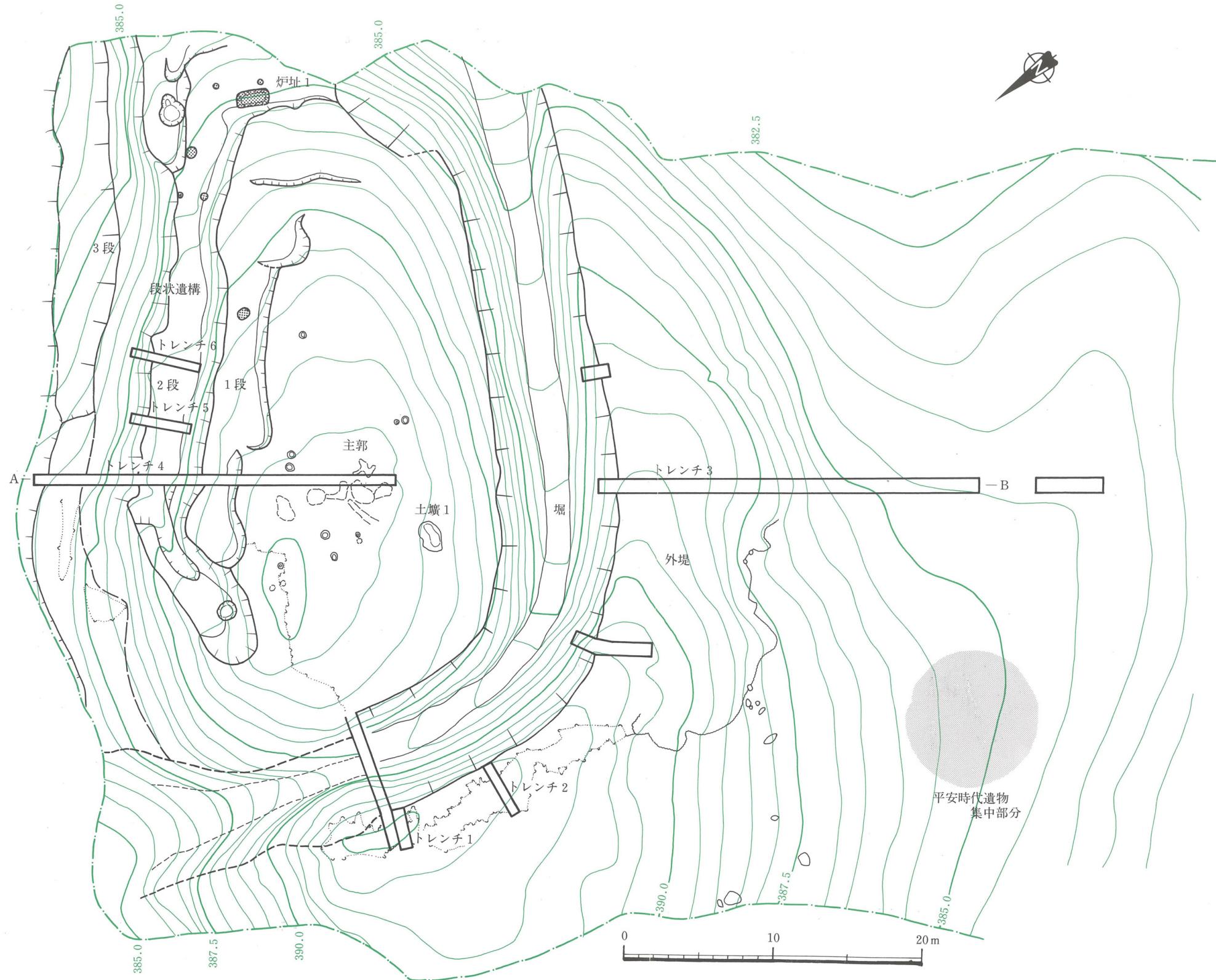
伐採後の表面観察において、独立丘陵北東部の最高所をとりまくかたちでL字状の堀および北側斜面に段状のテラスを確認し、中世の小城郭と推定された。調査は10m方眼を全体にかぶせ、幅2mのトレンチを10mごとに配置し、堀に囲まれた主郭部分と、外部の関連遺構の有無を調べることから開始された。その直後に、平安時代および中世の遺物群が検出され、全面調査に移行した。

その結果、周辺には郭は存在せず、箱堀をL字形に配置し、北側を三段の段状遺構によって囲む単郭の小城郭施設があらわされた。段状遺構・主郭・外堤上には、室町時代を中心とする遺物群が散布していることから、この小城郭の使用時期を示すものと考えられる。また、城郭外に向かって南にゆるやかに傾斜する緩斜面上に、一ヵ所の焼土面を中心に平安時代の土器群が集中分布する。落ちこみ、柱穴等は一切検出されず、遺跡の立地を考えあわせれば、通常の生活遺構とは考えにくく、その性格をめぐって問題を残した。

城郭外の丘陵全体(図3)には、踏査および無数に存在する山芋穴の断面と排土の調査を行ったが、堀切り・土壙等の遺構および遺物は認められなかった。



第3図 周辺地形と調査範囲



第4図 遺構および地形測量図

(1) 主 郭

標高 392 m の丘陵最高所を中心にやや不整な長方形平面をなし、北と東は段状遺構第一段に南と西は堀切りによって画される。約 300 m² の面積をもつが、フラットな平面ではなく、ことに北の段状遺構第一段に面するラインを除いては、端に近づくにつれて傾斜を増す。土壌、遺物の出土レベルから考えて、盛土等がこの三方向にかけて存在したとは考えられず、傾斜は築城時からのものと考えられる。したがって、堀切り内側に土塁等を造成した形跡もなかった。北側の段状遺構に面しては主郭も平坦なまま段に達する。土層観察からは、明らかに堀切りを掘削する際の土を使って盛土をなし、平坦につくりあげている。

主郭上には建物遺構を検出できなかつたが柱穴と考えられるピットを数カ所確認しており、土器の散布と合わせ考えれば簡単な小屋掛け程度の建物が城郭機能時に使用されたことは疑いえない。ほかに不定形の土壙が数カ所検出されているが、同時期の所産と考えられるのは土壙 1 のみである。

遺物は表土をはぐとすぐに出土しあじめ、主に城郭使用時および廃棄後のうすい自然堆積層中で分布に疎密をみせながら検出される。盛土中からの遺物の検出はなかつた。

室町時代の土師器杯、小皿、大甕胴部片、擂鉢片、鉄器片若干を検出した。量的には土師器杯が大部分を占め、土師器・小皿は数個体である。大甕・擂鉢は遺跡全体をみても各一個体に満たない。この量的傾向は、遺跡全体をみても変わらない。共同生活用具である大甕、擂鉢が極めて少ないという事実は、この施設を継続的に使用していなかつたこと、あるいはその意図がなかつたことを意味し、それは建物の貧弱さという推定と合致する。

室町時代といつても土器に時期幅があり、堀切りの改修の事実(後述)からして、短期間でかつ長期在城を意図しない布陣が繰返されていると考えられる。各々の在陣の規模は、食事時には個人に帰属したと考えられる土師器杯の数的に圧倒的であることから、少人数ではなく十数人から数十人を数える一隊が在城したと考えられる。

ところで、土器片の分布からみて、この主郭を居住の中心としたと考えられるが、柵列等の施設は検出できなかつた。

また、前述したように土塁もなく主郭は自然の険しさと堀切りのみによって守られたにすぎない。このような施設をどのように評価するかということが、今後の課題となる。



写真2 外堀西側より堀ごしに望む



写真3 遺物集中出土状況

(2) 堀切り

堀切りの調査は、5m毎に幅約1mのトレンチを入れて断面形状、埋積土層を観察した。その後、時間的制約からユンボによる堆積土除去を行い最後に堀底部を人力で検出した。したがって、堀切り検出の遺物のすべてを採集できなかつたと推定される。

断面形態は逆台形の箱堀状となる。底面幅は1.8～3mあり、外堤部上面との比高は、2～3.5mである。

堀は南側から円弧を描きながら北へ抜ける。堀切りの終わりは東側では自然地形に切斷されたように急に段をもつて終わるが、北側では、段状遺構第3段のさらに下方まで堀切りが急斜面を堅堀のようにつづき、細い道に接続して終わる。

堀切りの掘削位置は最高所から傾斜する斜面のかなり上位にある。したがつて、堀切り下側からみる堀はかなり高所にあり、斜面をのぼりきつて初めて視認できる。このような位置になぜ堀切りを設けたのか興味深い問題である。また、堀切りの際の排土は外堤に盛土用および段状遺構構築用に利用されており、北側部分では、岩礫層を掘り抜いているために、排出された人頭大の角礫を外堤部にもつてゐる。(写真2)

堀切り埋土断面には、明確な掘り直しが少なくとも一度行われている。堀切り全体にわたる大規模な改修であるが、当初の堀切りを拡大してはいない。埋土中には遺物は少なく、検出された遺物は、すべて掘り直しの後の急な埋積ののちの自然風化土層(表土下の黒色土) 中で検出された。

遺物は室町時代のもので、主郭の遺物構成と変わらない。

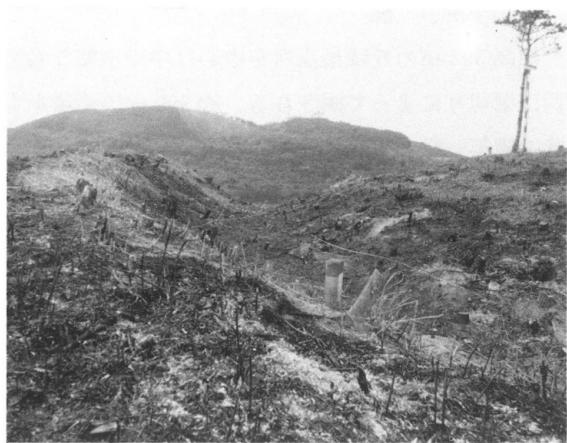


写真4 調査前の状況



写真5 調査後



写真6 堀の断面

(3) 外 堤

外堤とは、堀切り設営の際の排土・排出礫を堀切りの外側に盛りあげてはいるが、断面観察によると、土壘とは認めがたかったのでつけた名称である。

調査は表土および自然堆積層を除去して盛土上面で遺構全体を露出させ、その後、3カ所で基盤に達するトレンチを入れて断面観察を行った。したがって盛土すべてを除去するまではいたらなかったが、石を盛ったところはすべて除去して遺物検出につとめた。

その結果、堀切り外側の全周にわたって土盛りが認められ、厚いところでは1mをこえることが判明した。利用された土は明らかに堀切りを抜いた際の排土で、西側外堤をおおう人頭大の角礫群は、前述したように堀切り北部の自然岩礫層を掘り抜いた際の排出物である。この盛石には面を整えたり、大きさをそろえて構造物を造り出す意図はみられない。また、盛土を土壘状に構築してもいない。

遺物は、盛土上面、角礫群中、あるいは角礫下から少量ずつ出土している。その大部分は土師器杯である。

トレンチ1では角礫を除去した旧地表上面で、ほぼ完形の土師器杯が2個体並べて配置しており、築城時の祭祀行為の存在をうかがわせている。

ところで、この外堤から主郭への通路が存在したはずであるが、堀切り底部に何ら遺構を検出していないので、恒常的な施設は存在しなかったと考えられ、簡単な仮設橋のような施設の存在を想定している。



写真7 南より外堤・主郭を望む



写真8 北斜面に下る外堤端部



写真9 外堤の石盛り

(4) 段状遺構

調査前に、すでに第2段および第3段はテラス状地形として観察されたが、表土を除去すると第1段が検出された。調査は、各段上に堆積した黒色土を除去して、流れ込み状態の遺物群を検出しつつ、段の原状を追求し、その後盛土による造築部分を掘り下げた。

段状遺構全体は、北に向かって柴石川へ下降する急斜面に設けられている。したがってこの城郭は、急斜面を段状遺構(北東方向)緩斜面(南西方向)を堀切り区画する設計である。

各段は平行し、東側では平坦部を拡大させつつ屈曲する。主郭と第1段テラスの比高は50cm、第1段と第2段は80cm～1m、第2段と第3段は2～3mと次第に比高を高くさせている。各段は水平ではなく西に行くほど高く、東にいくほどゆるやかに下降する。とくに第1段と第2段の西端は急に上昇し、あたかも主郭への通路のように連なる。

各段の工法は第1段、第2段が盛土と削り出し併用。第3段はすべて削り出して築成されている。ことに第2段中央部(トレンチ5)では1m近い盛土が観察され、その盛土中に厚さ20cmをこす炭化材と焼土層がみとめられ、築造前の伐採に伴う山焼きの可能性がある。また、断面観察から第1段、第2段の盛土部を築成した後に第3段を削り出している。

第2段東側平坦面では斜面に接して、炉1が(後述)設けられているほか、その周辺に数カ所の性格不明の小規模の焼土面がある。

その他の柵列等の構造物の遺構は検出されなかった。

遺物は、各段の風化堆積土(黒色土)中で流れ込みの状態で検出されているが、数カ所の集中分布地点があり、その中には、完形品が置かれたような状況で検出された場合もある。



写真10 段築遺構(2～3段目)を北西下方から望む



写真11 1段～2段目を北西上方から望む

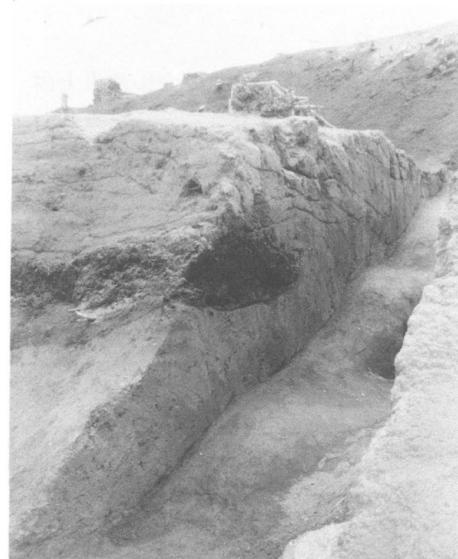


写真12 2段目築成状況

遺物の構成は主郭と変わらないが、それに中国製白磁碗、朝鮮製(?)白磁碗、瓦器碗が1・2例ずつ加わるほか、銅錢が一枚発見されたのみである。

炉 址 1

この炉址は第2段が東側で屈曲しつつ広くなるテラス上にあり、長軸200cm、幅130cmの隅丸長方形を呈する炉址で、深さ30cmの逆台形をなす。側面および底面は加熱赤変しており、その焼土面に接して厚さ10cm近い炭化材単純層が堆積する。その上に基盤層ブロックの混じる層が埋積し、使用後ただちに埋めもどした様相を示す。炉の大きさ、および炭化物の量からして、かなりの火を短期間に使用したと考えられる。のろし台として使用された可能性があり、類例との比較検討を待って結論づけたい。



写真13 炉址1 完掘後

(5) 遺構の関連

調査によって確認された堀切り、外堤、段状遺構、主郭は、構築にあたって有機的に関連していることは明らかである。堀切りの排土を外堤と主郭・段状遺構の盛土に使用しつつ造営し、労力を最小限に節約しながら、統一的な計画・指揮のもとに築城されている。築城の規模に比べて建築遺構は極めて貧弱であり、恒常的な施設の存在はうたがわしい。これは土器の構成からもいえることである。

(6) 平安時代遺物集中分布

中世城郭の外堤斜面を南へ下る斜面に、平安時代の土器群が集中分布する。斜面は10mにつき1~1.5m下がる緩斜面で、テラス・掘り込み・柱穴等の遺構は、精査したにもかかわらず検出されなかった。ただ一ヵ所、火を受けた焼土面を検出したが、出土土器の半数はこの火所よりも下位のレベルで検出した。

また、土器の出土状況は、大型破片が、つぶれた状況でいくつか検出されたが、一個体が完存する状況はない。その他は、かなり散乱した状況である。

集中分布地点の北は中世城郭の立地する最高所にさえぎられ、東西の視界もせまく南面のみが広がり、丁度、鶴見岳を正面に見ることができる。

したがって、信仰遺跡の可能性もあるが、同時にこの場所は北からの風をさえぎり、南面して日あたりがよく、何らかの理由でこの山中に生活を求めた人があったのかも知れない。土器は後述するように9世紀初頭から10世紀代にわたる。

3) 遺 物

ふいが城遺跡全体からは、平安時代と室町時代と考えられる二群が検出されている。なお、接合・個体識別が不徹底であるので量的関係は概数であることをお断わりしておく。

平安時代の遺物(第5図)

遺物集中地点およびその周辺からの出土がほとんどである。須恵器、土師器、黒色土器A類（いわゆる内黒土器）よりなり、須恵器、黒色土器A類は各一個体のみで、あとはすべて土師器である。1は須恵器杯で回転利用ヨコナデ調整後回転ヘラ切り離し。内面に同心円状の凹みを残す。高台は断面逆台形で外端を接地する。口径16.0cm、底径10.0cm、器高5.5cm。2は土師器杯、回転利用ヨコナデ後回転ヘラ切り離し、はりつけ高台はやや外にはりだして逆台形。底径9.5cm。3は土師器蓋で復元口径15.0cm、器高1.4cm。つまみはなく端部を丸くおさめ、わずかに浅い身受け部が残る。回転ヘラ切り離し後、外面の一部に回転ヘラケズリ。内面に散漫な回転利用ヘラミガキをほどこす。4、5も土師器杯で、体部と底部が明瞭な稜線で画されるものとそうでないものがある。両者とも回転利用ヨコナデ調整後、回転ヘラ切り離し。4は口径13.6cm、底径8.0cm、器高3.0cm。5は口径12.6cm、底径8.1cm、器高2.7cm。6は土師器椀で、底径7.4cm。回転ヘラ切り離しの後、断面三角形でやや外に張り出す高台をはりつけ、最後にヨコナデで仕上げている。

このほか、甕が3～4個体出土しているが、小皿、脚付皿は全くない。黒色土器は内面に丁寧なミガキを施す体部片である。

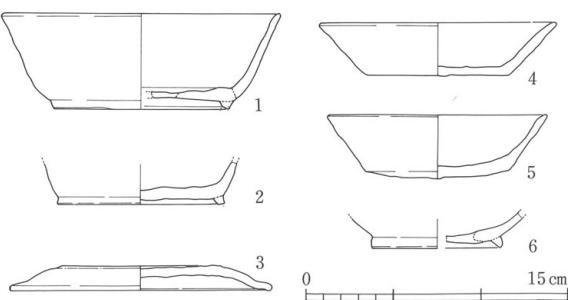
1、2、3から上限を九世紀初頭前後、下限は回転糸切り離し以前、小皿出現以前という点と杯の形態から、10世紀前半前後に及ぶと考えられる。

中世の遺物(第6図)

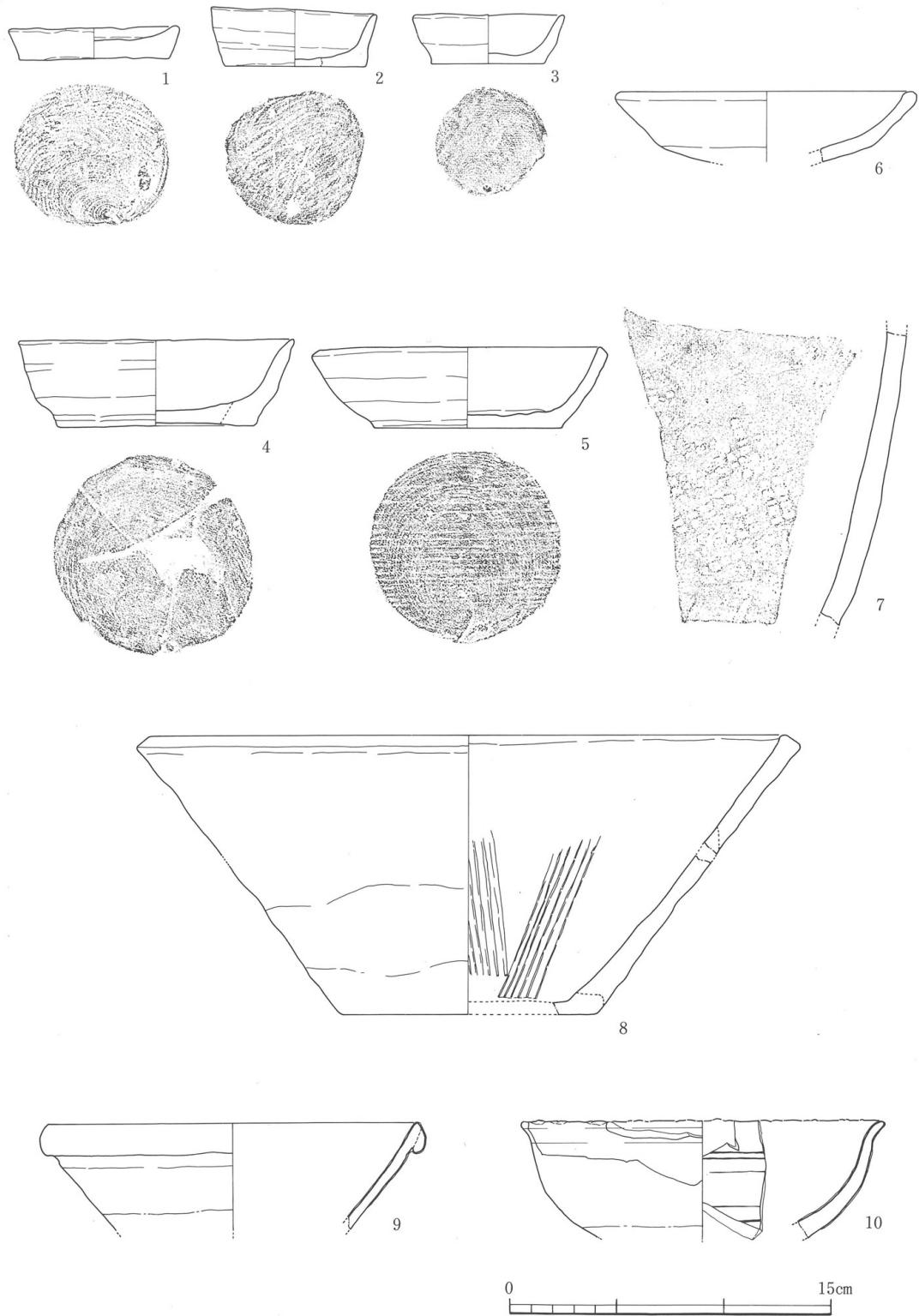
中世城郭各地区から出土した遺物の中心となる土師器は、すべて回転糸切り底である。出土遺物の大半は杯で、小皿が次にくる。分類すると、小皿A(1)、小皿B1(2)、小皿B2(3)、杯A(4)、杯B(5)に分かれる。量的に主体を占めるのは、小皿B1と杯Bで、セット関係になると考えられる。小皿Aは、一点のみ出土で、杯Aとセット関係になる可能性がある。2、5には板状压痕がある。小皿B2は、形態において杯Aによく似ているが、小皿Aとのへだたりは歴然としており、その位置づけは検討を要する。6は瓦器椀と考えられるものである。復元口径14.0cmで高台はなく、端部を丸くおさめ、底部には多数のヒビ割れが走る。7は大型甕の胴部片で外面には格子目叩キが残る。8は瓦質土器の擂鉢である。

輸入陶磁器として、9は白磁で玉縁の口縁を有するものである。10は朝鮮製白磁の可能性のある椀である。底部外面は露胎で、口縁は外反し輪花様の浅い抉りが入る。胎土は良質で、釉は光沢の強い透明釉を用い、全体に貫入が入る。青灰色を呈する内面に白色象嵌の可能性がある圈線が2～3条走る。

このほかに銅錢が一枚出土しているほか、鉄器が数片出土している。



第5図 遺物 (1)



第6図 遺物（2）

4) 小 括

最後にふいが城遺跡、とくに中世城郭の年代と調査から提起された問題を整理して、本報告への責としたい。

(1) 城郭遺構の年代について

前節でふれたように、輸入陶磁器はきわめて少なく、個々の磁器についてもなお検討の余地があるので、ここでは量的に多数を占める土師器を中心に考えてみたい。

まず、土師器全体の胎土、砂粒の多さからみて、13世紀まではさかのぼらないと考えられる。杯Aは、口径、体部のつくりから14世紀前半にいちづけられている杯の一群(註1)に類似する。杯Bは口縁端部のつくり、砂粒、焼成具合からみて、内湾するという点にもかかわらず、杯Aより古くはならないと考える。小皿Aは、三重町惣田遺跡で14世紀中頃～15世紀中頃とされた皿(註2)に近似している。小皿Bは、大分県内では16世紀代に位置づけられているが、太宰府では14世紀初頭から出現する器種である(註3)。分類された個々の土師器を合わせると14世紀前半から16世紀までの時期幅がある。輸入陶磁器として玉縁の白磁は12、3世紀を中心として14世紀まで残る(註4)。さらに16世紀を特徴づける染付が一片も検出されていないところから、16世紀後半まで下る可能性は少ない。ただし、小城郭であり、短期的な利用の繰返しという状況から考えると、染付の不在は下限を限る論拠としてはやや消極的であろうか。以上が、土師器からの推定である。もう一つ、瓦器については宇佐地方の遺物と比較すると小倉正五氏のIV-b期に類似し、15世紀前半以後となる(註5)。したがって、出土遺物からは15世紀前半～16世紀前半の時期幅のどこかで城郭の築成が行われたという限定のできる可能性がある。

ところで、以上個々に検討してきたのであるが、量的あるいは遺構における分布状況から、この城郭の築成時期と使用時期を代表する器種は、杯Bと小皿Bである。杯Aは数個体、小皿Aは一個体にすぎず、時期の異なる一群と考えても城郭の築成時期とは無関係である。また、小皿Aは器種構成からみて、杯B、小皿Bとセットになる可能性も否定できない。したがって、杯B、小皿Bのセットの類例が判明してくれれば、時期は明確になるであろう。

(2) 遺跡の立地と性格について

ふいが城遺跡の立地する独立丘陵は柴石川の最上流部にあたり、竈門荘の中心であったと考えられる現在の内竈周辺からみると、可耕地の極めて少ないV字谷を2～3kmさかのぼった地点に位置する。また石垣荘からみると北鉄輪丘陵を越えた一つ向こうの山上にあたる。このように当時の生活の中心からへだたった高所に立地するこの小城郭をどのように理解すべきであろうか。

一つは、居館一説の城としての関係と考えられることがあるかどうかという点。この場合は竈門荘の地頭職を世襲した竈門氏の居館との関係を検討する必要がある。もう一つは、中世の交通路との関係から城の性格を考える立場である。石垣荘から鉄輪に至りそこから北の丘陵を越え、ふいが城遺跡のる丘陵の南の谷を経て十文字原に上り安心院、宇佐に達する豊前への往還(註6)が古代以来存在した可能性がある。その道筋がたしかなものであれば、豊前地方の緊張が豊後に伝わるときには、極めて戦略的位置を与えられるものとなろう。

上記の二つの観点とやや異なるが、ふいが城遺跡の眺望からみると、高崎山城、大友浜脇館を間

近に、大分市上野の大友館、府内、さらに遠く佐賀関を遠望する位置にある。豊前からの情報を大友氏の本拠に伝えるのに極めて適した位置にあたる。地域の豪族との関係とは別に、豊後大友氏全体の軍事組織の中で位置づけるという観点からの検討も必要となろう。

以上のように、ほぼ三つの方向からの検討が、類例との比較もあわせて行われる必要がある。

(3) 伝承について

地元の湯山の集落に伝わる伝承として、この地がかつて城であったとのみ伝承されており、それ以上のこととは伝わっていない。

ほかにわずかな手がかりとして、次の二つのものがある。一つは、福田紫城氏によってまとめられた別府の歴史についての冊子(註7)の中にある記述で、城址の名称を湯山城、宇土城あるいは藤ヶ城といい、「お上使道」と称された豊前佐田越の道の要害として大友氏が作り、谷川美濃守という者に守らせたこと。弘治3年(1557年)、大友宗麟が宇佐龍玉城を攻めた際に、谷川は宗麟の出兵催促に応じず殺されたこと。以上のこととが、出典は不明だが記されている。

もう一つは、唐橋君山の『豊後国誌』卷三に「湯山寨」、「藤城山堡」の項目があること。

前者の資料は出典が不明で、かつ遺物の年代観と厳密には一致しないこと。後者については脚註に疑問点があるなど、文献・伝承からの比定はまだ容易ではない。ただし、以上の中で再出した「藤ヶ城」「藤城」という名称は、当遺跡の小字名「ふいが城」と音韻が通じる面があり、文献史料との接点をみだしうる。

同時代の文献資料の探索が急務の課題である。

以上、いくつかの問題を示したが、なお地名・地形・周辺遺跡等調査を必要とする問題が多い。これらの課題解決にあたっては今後、文献史学・地理学等との積極的協力が必要となるであろう。

註1 大分市万寿寺跡杯・三重町惣田遺跡杯Cに似る。

菊田徹編『臼杵石仏群地域遺跡発掘調査報告書』1982年臼杵市教育委員会

玉永光洋編『惣田遺跡—三重地区遺跡群発掘調査概要』1983年三重町教育委員会

註2 同上

註3 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』
註4 4. 1978年

註5 小倉正五「宇佐地方の瓦器碗について」『古文化談叢』14. 1984年九州古文化研究会

IV—b期に後出する瓦器が、宇佐市弥勒寺址・三光村ズリヤネ遺跡(村上久和氏教示)で知られている。

宮内克己『宇佐宮弥勒寺—宇佐宮弥勒寺旧境内発掘調査概報』II. 1985年

註6 豊前佐田越の道と呼称されている。

註7 福田紫城『別府温泉名勝史稿』および福田氏の資料をもとにして次のものがある。

南好道編『湯山史考—湯山の史址と伝説』1949年

安部巖編『湯山の里—観光と史料』私たちの地方史研究会 いずれも別府市立図書館蔵
上記の資料の検索にあたっては、安部巖氏・別府市立図書館の協力を得た。
また、年代については後藤一重、渋谷忠章、玉永光洋、宮内克己、村上久和各氏の助言を得た。

III 机張原・高崎地区

昭和60年2月～3月にかけて、机張原・高崎地区の試掘調査を行った。

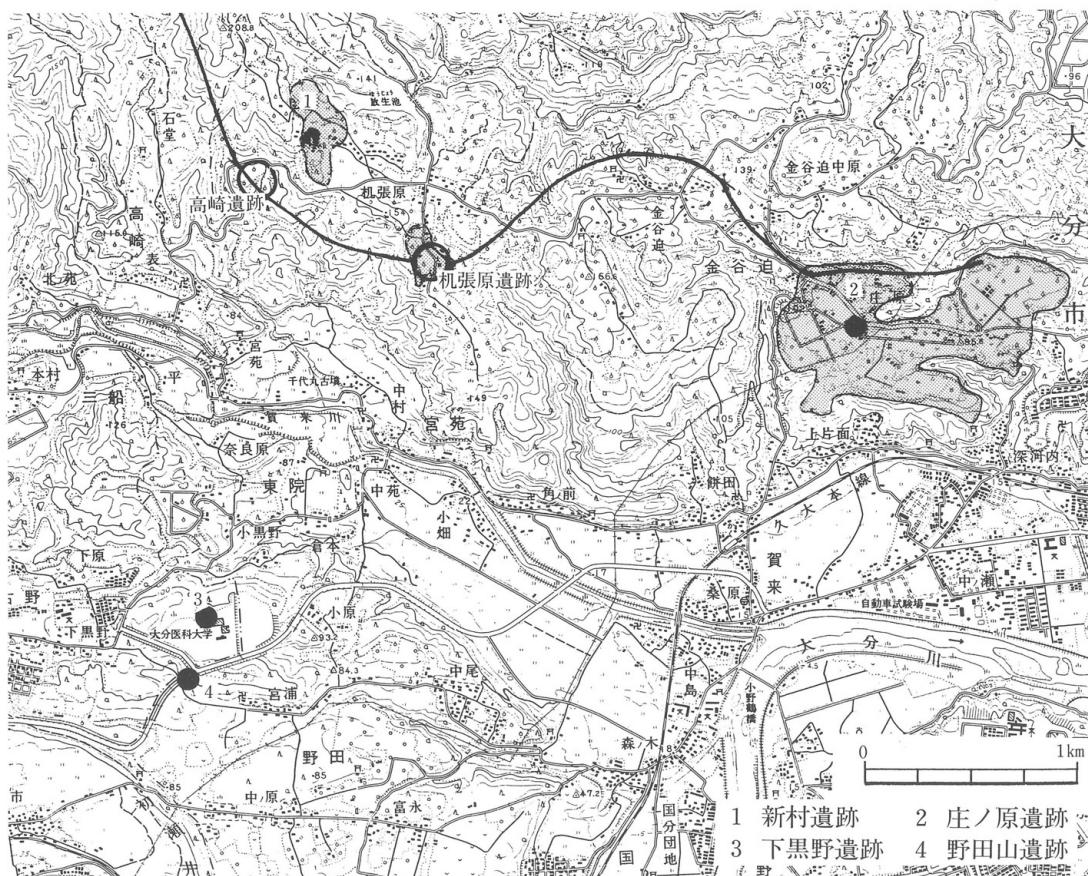
この付近は、高崎山の背後に広がるなだらかな丘陵地帯で標高100～150mをはかる。机張原地区は南にのびる台地状の平坦面上をB、C、D地区と近世墓地(A地区)に分割し、B、C地区の試掘調査および近世墓地の測量調査を行った。高崎地区は、谷低地部をB区、舌状台地上部をA区としてA区を試掘した。

その結果、机張原C区ではミカン畑開墾によってかなり損傷を受けているものの、旧石器時代の剥片、チップの集中地点を一ヵ所確認した。石材はホルンフェルスを主体に、チャート、安山岩を含む。また、C区谷部では時期不明の溝状遺構を2条検出している。B区では剥片を二点検出したのみである。高崎A区では何らの遺構・遺物も検出されなかった。

近世墓地

女孤(メハル)集落の共同墓地として、現在4家族によって共有されているこの墓地は、明暦年銘(1650年代)の墓碑を最古として、正徳、享保年間以後明治中頃にいたる墓地である。累代墓以前の近世墓地景観をよく残しており、墓地とともに葬祭場施設としての棺台、その正面に六地蔵、両端に一字塔を配した空間構成は近世後期の墓地景観をよくつたえている。

今回この墓地の移転に先立って、墓地全体の測量と個々の墓碑のカードづくりを行った。



第7図 周辺の旧石器時代遺跡

墓標は一石一字塔を含めて総数 120 基を数える。石材は安山岩製の 2 基を除いてすべて硬質凝灰岩製である。この石材については、高崎 A 地区の周辺に同質石材の産出地がある。20 年ほど前まで石切場として利用していたとのことで、斜面には石切り出し後の鎬打工程で伴出したと考えられる凝灰岩碎片が 10 数カ所にわたって墨々と堆積している。同一石材かどうか同定が必要である。

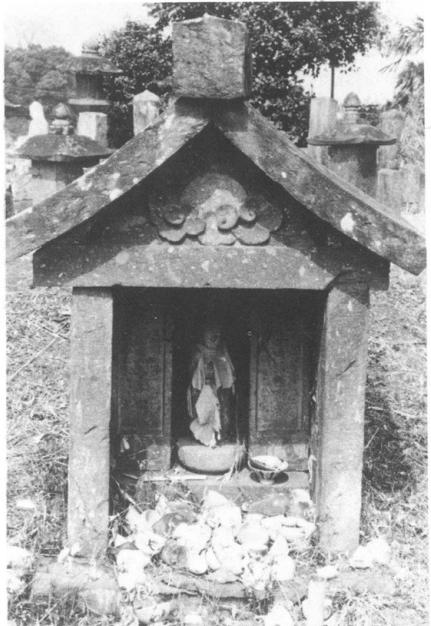
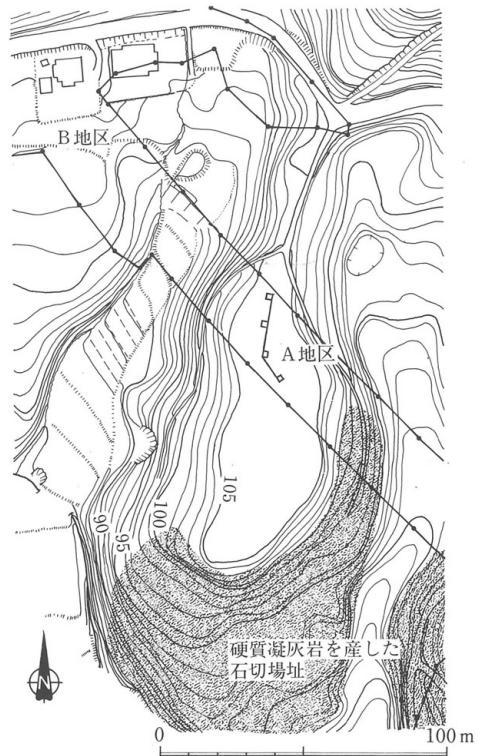
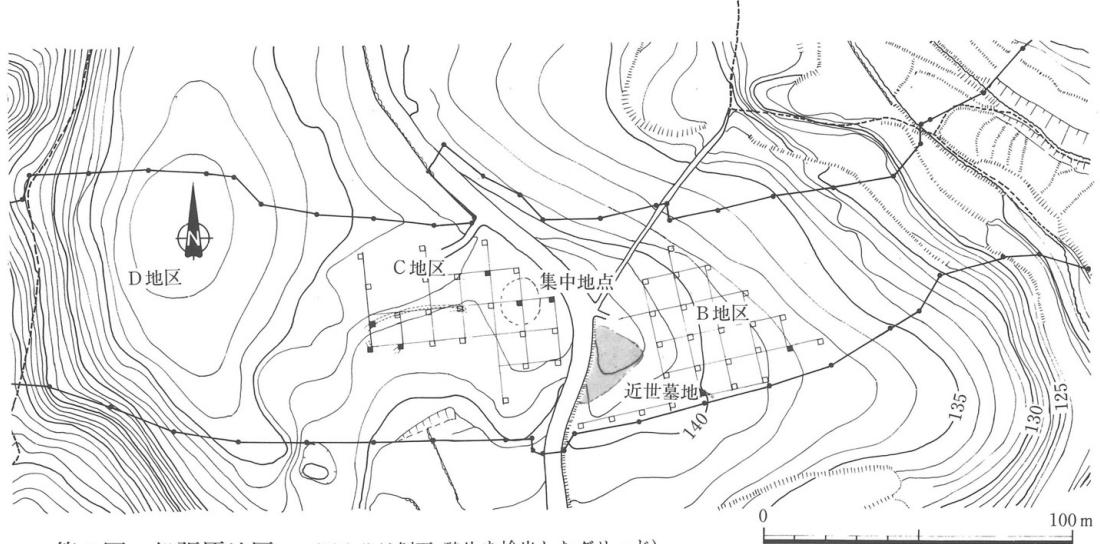


写真14 近世墓地78号墓標



第8図 高崎地区



第9図 机張原地区 (黒ぬりは剥石・碎片を検出したグリッド)

IV ま　と　め

昭和60年度の前半は、別府市ふいが城遺跡の調査に終始し、山城跡をほぼ完掘した。その立地は市街地および海岸線から相当離れた位置にあり、居館に接する詰の城とは性格を異にするものと思われる。その位置は、南側に現在の別府—安心院線の県道が通っており、北側は亀川古市から登る古道に接している。現地を見られた阿蘇品保夫氏は、その立地からみて安心院方面に通ずる幹道の抑えの城としての性格を指摘されている。調査結果の内容から在陣の期間は短期のものと考えられ、また烽火の施設と推定される大型の方形炉の存在からその可能性をつよくするものである。

15、16世紀の大友氏は、一時豊前を統治した大内氏と勢場原合戦をピークとする緊張関係にあり、その前線にあたる速見郡内の諸城を築成・整備し、戦闘に備えたであろうことは想像に難くない。ふいが城遺跡の位置は、そうした宇佐郡に通ずる主要道の一つに接するとみられ、抑えの城としての性格は肯首されるべきものと思われる。今後はさらに周辺調査および文献調査を重ね、その性格をさらに裏付ける必要があろう。

年度の後半は、大分市机張原遺跡の試掘調査を主とした。その結果、先土器時代の包含層を確認し、来年度に本調査を実施することにした。大分郡内での同時代遺跡の調査は少なく、その成果が期待されるものである。

ふいが城遺跡

九州横断自動車道建設に伴う発掘
調査概報（別府大分地区）

1986.3.31

発行 大分県教育委員会
印刷 東洋印刷有限会社

